

# 「有能な乳児」の姿はどれほど認知されているのか？

—保育者養成校学生の場合—

永盛善博<sup>1</sup>

(<sup>1</sup>東北文教大学短期大学部子ども学科)

## 問題と目的

1980年代以降、乳児の認知・知覚能力の高さが頻繁に主張されている。この背景には選好注視法、馴化脱馴化法、期待背反法など、乳児の視線を指標とする方法の利用が挙げられる。これらの方法を用いた結果、行動を指標とした従来の研究が示すよりも乳児の認知・知覚能力が高いことを示唆する研究が、数多く発表された。この視線を指標とした研究が示す乳児の姿は、「有能な乳児 competent infant」などと呼ばれる。

それでは、この有能な乳児の姿は発達研究者以外でどの程度認知されているのだろうか。乳児研究活性化のきっかけとなった Baillargeron による物の永続性実験から、30年近く経とうとしている。したがって、発達研究者以外にも、その成果が浸透し始めていてもそれほど不思議なことではないだろう。

本研究では、第一報として、保育者養成校の学生を対象にしたアンケート結果を報告する。保育者は、日々乳幼児と関わり、その発達を促す役割を担う。発達を促す役割を担うわけであるから、認知・知覚能力の発達についても十分な知識を有している必要があるだろう。それでは、保育者を目指す保育者養成校の学生の場合、どの程度の知識を有しているであろうか。発達心理学を学習する前であっても、子どもの発達に対しては関心があり、ある程度知識を有すると予想される。

## 方法

**対象**：東北地方の短期大学保育者養成学科1年生84名（男子3名，女子81名）。平均年齢19歳（数名を除いて高校新卒であった）。いずれの学生も、これまでに心理学系の科目を受けたことはないものの、高校の家庭科で子どもの気持ちの発達を学んだ学生が数名程度見られた。

**方法**：心理学系科目（発達心理学，教育心理学，保育の心理学等）が始まると、心理学的知識が回答に影響を及ぼす可能性があるため、大学にて心理学系科目の具体的内容を講義するに先だって、アンケートにて回答を求めた。

**項目**：以下の能力について、それぞれ可能かどうかを尋ねた：新生児…泣き，視覚，聴覚，嗅覚，味覚，触覚，歩行，まね；生後数ヶ月の乳児…色覚，物の数，物の大きさ，物の移動，養育者の表情。泣きは，産声と表現されてきたように1980年代以前も一般に認知されていたものであり，学生も正答できると予想される。そのため，学生の回答に虚偽が含まれているかの判別のために質問した。

## 結果と考察

質問項目ごとの学生の回答をまとめたものが，表1である（数字は人数）。各質問項目で二項検定を行った結果，味覚を除いて有意差が見られた。ちなみに，個人間の回答の違いについては，13問中，「できる」という回答数の平均は8.4，標準偏差は1.8であった。

表1. 各質問項目に対する回答数

回答	泣き	視覚	聴覚	嗅覚	味覚	触覚	歩行	まね	色覚	数	大きさ	動き	表情
できる	84	33	77	58	46	77	2	13	75	20	55	77	79
できない	0	50	6	24	37	6	82	69	7	62	27	5	3
p値	p<.01	p<.10	p<.01	p<.01	n.s.				いずれもp<.01				

まず、「泣き」質問に全学生が「できる」と回答したため，後続する一連の質問に対しても，学生が虚偽をせずに回答したと推定する。

つづいて，各質問への回答を見てみると，ひとくくりにされる五感でも，聴覚と触覚に対して，嗅覚は若干「できる」回答が少なく，視覚や味覚はさらに少ない。一方で，同じ視覚でも，生後数ヶ月ともなれば色や物の動き，養育者の表情は知覚できると答えている。また，歩行やまね，数の認知については，「できる」回答が有意に少ない。今後の課題として，このような判断の違いの原因をインタビュー法を用いてより詳細に探ることが挙げられる。また，対象者の属性をより多様にして，専門教育を受けていない対象者での認知度をより広範に探ることも必要である。

※本研究の内容は，日本教育心理学会第54回総会（2012年度）にて発表予定であった。しかし，日程の都合により発表を取り消したため，今大会にてあらためて発表した。